

日韓文化交流基金 NEWS

2013.6.28 NO.66

The Japan-Korea Cultural Foundation

Contents

- | | |
|--|---|
| 1 青少年交流
アジア大洋州地域及び北米地域との
青少年交流(キズナ強化プロジェクト)終了 | 8 助成事業紹介
琉韓伝統舞踊ワークショップと
現代舞踊の共創
明治大学情報コミュニケーション学部
准教授 波照間永子 |
| 2 青少年交流
日韓青少年共同ボランティア活動事業 | 9-10 日韓文化交流基金事業報告
(2013年1~3月) |
| 3 フェロー事業
2013年度
訪日・訪韓フェローシップ採用者決定 | JENESYS2.0始まる |
| 4-5 フェロー研究紹介
在朝日本人の生活文化と
植民地朝鮮の文化変容
ソウル大学校大学院人類学科 車恩姪 | JENESYS^{2.0} |
| 6-7 助成事業
2013年度 助成対象事業決定 | 11 賛助会員制度のご案内 |
| | 12 事務局長退任挨拶 阿部孝哉 |

「アジア大洋州地域及び北米地域との 青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」終了 日韓の青少年1632名が交流

「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」とは、アジア大洋州地域及び北米地域の41の国・地域から青少年を日本に招へいし、東日本大震災の被災地視察や交流プログラムなどを実施するとともに、被災地域の青少年をそれぞれの地域へ派遣することを通じて、日本再生に関する外国の理解増進を目的とした事業です。

当基金は韓国との間の交流事業を担当し、2012年度の1年間で日韓の青少年1632名*が参加しました。

※招へい 1045名、派遣 587名

・招へい事業

韓国の中学生、高校生、大学生、小中高の教員からなる研修団が、文化体験やホームステイなどのほか、被災地では地元青少年との交流行事や学校訪問などを行いました。韓国からの参加者たちは、地震の被害だけではなく、沿岸部の津波被害を目の当たりにし、また地元の方々から被災状況の説明を受けたりする中で、マスコミを通じてのみ知っていた被害状況をより実感を持って知ることが出来たようです。また地元の青少年と交流する中で、かえって元気をもらったという参加者もいました。

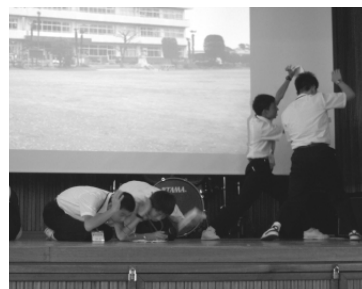
本事業を進めるにあたり、震災からの復興状況や再生のために取り組んでいる人々の姿を伝えてもらうことを目指していましたが、多くの団員が被災地日程を通じて見聞きしたことや感じたことを、帰国後、SNSや学校などで情報発信をしてくれています。



韓国教員、中学2年生と一緒に韓国の民謡を歌う
(宮城県七ヶ浜町立向洋中学校)

・派遣事業

被災地の中学生、高校生、大学生、小中高の教員などからなる研修団が韓国を訪問し、学校訪問などで韓国の青少年に、東日本大震災の被害状況や復興への取り組み、自らの被災体験、ボランティアの経験などを伝えました。どのグループも直前まで何度もリハーサルを重ねて臨んだ甲斐もあり、自分たちの思いは韓国の青少年にも伝わったと実感することが出来たようです。発表後の交流会でも、日韓の青少年同士ですぐに打ち解ける姿が見られました。



福島県いわき市中学生、地震発生時の様子を熱演する(韓国光照中学校)

一年間の招へい・派遣事業を通じて、被災地をはじめとする日本と韓国の青少年が互いに理解し、キズナを深めることができました。本事業を進めるに当たり、多くの方々にご協力を頂きました。ありがとうございました。

日韓青少年共同ボランティア活動事業

「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流（キズナ強化プロジェクト）」の一環として、「地域おこし」をテーマに、日本と韓国の大学生、大学院生を対象に「日韓青少年共同ボランティア活動事業」を実施しました。両国団員は訪日、訪韓プログラムの両方に参加し、東日本大震災被災地の訪問や、ボランティア活動などを行いました。

本事業は、日韓の共通課題であり、被災地でも問題となっている「地域おこし」を事業テーマに定め、訪日、訪韓各7日間の日程を通して問題の解決策を話し合いながら、両国への理解と交流の増進を図ることを目的としています。日韓団員は両方のプログラムに参加し交流を深めるとともに、このテーマに真剣に取り組みました。

先に行われた訪日プログラムでは、日韓の団員が岩手県陸前高田市を訪問し、津波で甚大な被害を受けた町の様子を視察したほか、特定非営利活動法人P@CT伊藤雅人代表理事から講義を受け、被災地でのボランティア活動の様子について話を聞きました。その後、2日間にわたり日韓団員が協力して側溝の泥出しやがれきの回収・分別などのボランティア作業を行いました。

ボランティア活動後には「被災地で新たなコミュニティ創設のために我々ができること」というテーマのもと、ディスカッションを行いました。団員からは、<ゆるキャラ>などのシンボルを作り地域の連帯感を強める、お祭りやイベントを土台としたコミュニティを形成する、といったアイデアが提案されたほか、専攻を生かして子供たちに勉強を教えるなど、大学生ならではの地域支援を行いたい、といった意見が出されました。



力を合わせ側溝の泥かきを行う

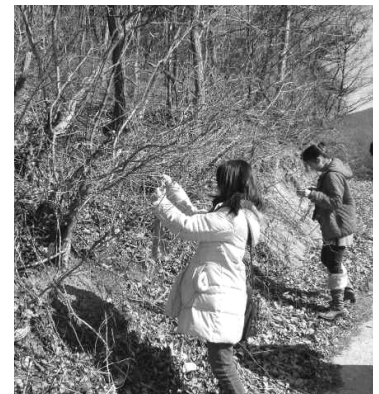
続く訪韓プログラムでは、地域おこしに取り組む全羅南道鎮安郡を訪問し、鎮安郡村づくり研究所の具滋仁所長による講義を受けたほか、ボランティア活動や、被災地に居住している日本側団員が震災からの復興に関する発表を行ったりしました。

日韓団員共同のボランティア活動では、村同士をつなぐ道を景勝地としてアピールするため、「高原道」と名付けられた道沿いに散歩道の印となるリボンをとりつける作業を行いました。また、過疎化により長い間途絶えていた「正月大満月祭」を復活させるため、研修団は斗元村、元延草村を訪問し、ボラ

ンティア活動を行いました。日韓団員は、村の人と協力して祭りの準備を行い、一緒に祭りに参加したことで村の人々とも親睦を深めました。

日本側団員による復興に関する発表は、斗元村、元延草村で行ったほか、鎮安郡庁でも行い、韓国の人々に日本の復興の様子と、震災を忘れないで欲しい、といったメッセージを発信しました。

日程の終わりには、総括として、鎮安郡をモデルに「地域活性化について我々ができること」というテーマでディスカッションを行い、「特産品をブランド化する」「企業誘致や就労援助に力を入れる」「若者の教育を通して地元を大事にする意識を向上させる」といったユニークなアイデアが発表されました。



高原道にメッセージを書いたりリボンを結んで行く

団員からは、

「人的交流の力の大きさを感じた。ボランティア活動、ディスカッションを通じて、人と人とのつながりがすべての問題の根本的な解決につながる鍵だということに気が付いた」「訪日プログラムでは被災地を訪問し、訪韓プログラムでは韓国の農村の現状に触れることができた。この現状をたくさんの人々に伝えていく義務があると感じた」といった感想が出ており、本事業が両国の学生同士が理解し合う契機となりました。

<主要日程>

訪日プログラム	訪韓プログラム
2/11(月) 成田空港着、浅草見学、研修オリエンテーション	2/21(木) 仁川空港着
2/12(火) 講義、歓迎昼食会、外務省訪問、岩手県一関市へ移動	2/22(金) 清溪川文化館見学、歓迎昼食会、サムルノリ体験、Nソウルタワー見学
2/13(水) 大船渡市へ移動、震災ボランティアに関する講義、陸前高田市内視察(語り部による案内)	2/23(土) 全羅南道鎮安郡へ移動、鎮安郡村づくり支援センター見学、地域おこしに関する講義、ハクスン里村博物館見学
2/14(木) 日韓共同ボランティア活動1日目	2/24(日) 日韓共同ボランティア活動、東日本大震災復興に関する情報発信
2/15(金) 日韓共同ボランティア活動2日目、一関市へ移動	2/25(月) 地域文化体験(豆腐作り、わら工芸品作り)、鎮安郡庁訪問(東日本大震災復興に関する情報発信)、ディスカッション
2/16(土) ディスカッション、感想報告会	2/26(火) ディスカッション報告会、感想報告会、ソウルへ移動
2/17(日) 仙台空港から帰国	2/27(水) 仁川国際空港から帰国

2013年度 訪日・訪韓フェローシップ採用者決定

2013年度訪日・訪韓研究支援(フェローシップ)の採用者が決定しました。

訪日35名、訪韓9名の応募があり、このうち訪日フェローは22名、訪韓フェローは4名が採用されました。

●訪日フェロー

氏名	所属	職位	研究テーマ	受入機関
高景順	済州大学校人文大学 日語日文学科	非常勤講師	在日済州女性の生の再解釈—元秀—の「猪飼野の物語」を中心に	大阪市立大学大学院 文学研究科
権東祐	圓光大学校圓 佛教思想研究院	責任研究員	日本近世における「スサノヲ」の変貌と「檀君」の解釈に関する研究	佛教大学大学院 文学研究科
権慈玉	ハイデルベルグ大学 社会学研究科	研究員	ジェンダーの視点から捉え直す日本の経営管理者—ビジネス誌分析(1960~2012年)—	一橋大学大学院 文学研究科
金仙熙	漢陽大学校国際文化大学 日本語文化学科	非常勤講師	東アジア境界地域研究—交流と葛藤が共存する空間としての境界	島根県立大学北東アジア 地域研究センター
金素英	ソウル大学校社会科学大学 社会福祉学科	博士課程修了	ソウルと大阪における脱ホームレス過程の比較研究	大阪市立大学 都市研究プラザ
金蓮玉	東京大学大学院人文社会系 研究科日本史学研究室	博士課程修了	幕末海防政策と長崎海軍伝習	東京大学史料編纂所
金重燮	慶熙大学校文科大学 国語国文学科	教授	『日韓共同理工系学部留学生受入事業計画』プログラムにおける学習者たちの日本留学・日本語学習・理工系専攻学習に対する確信と不安の意識についての調査研究	東京大学大学院情報学環
金泰鎮	ソウル大学校政治外交学部 外交学専攻	博士課程修了	日本政治思想における身体と国家：国家有機体論を中心に	東京大学大学院 総合文化研究科
朴盛彬	亞洲大学校社会科学部行政学専攻	副教授	日本の財政投融資に関する政治経済学的分析	大阪大学大学院法学研究科
朴成鎬	韓国学中央研究院蔵書閣	専任研究員	東アジア三国の王命(皇命)文書の比較研究	京都大学人文科学研究所
朴薫	ソウル大学校人文大学東洋史学科	副教授	明治維新と儒教的政治文化	京都大学人文科学研究所
宣有貞	全北大学校科学技術文化学科・ 同科学文化研究センター	兼任教授・ 研究員	帝国主義時代における朝鮮人農学者の成長と分化	京都大学農学研究科 比較農史学研究室
蘇明仙	済州大学校人文大学 日語日文学科	副教授	日本のマイノリティ文学に見る異文化融合と多文化主義	立教大学文学部
孫栄爽	済州大学校人文大学日語日文学科	非常勤講師	日・韓表現行動に関する先行研究の統計的検証	大阪大学大学院文学研究科
李相侶	カリフォルニア大学 パークレー校日本学研究センター	客員研究員	戦後日本の為替政策、日韓の為替政策比較、現代国際通貨制度	早稲田大学大学院 商学研究科
李政桓	国民大学校国際学部日本学専攻	助教授	民主党政権と公共事業—現代日本における地域再分配政策改革の行方	東京大学社会科学研究所
朱宇正	School of Film, TV and Media Studies, Faculty of Arts and Humanities, University of East Anglia	研究員	初期発声映画をめぐる言説の歴史：日本と朝鮮の比較研究	名古屋大学大学院 文学研究科
池恩叔	ソウル大学校社会科学大学 人類学科	博士課程修了	ライフヒストリーから見る現代日本女性の親密圏の変化：40-50代の非婚女性の家族関係を中心に	一橋大学大学院 社会学研究科
崔元碩	慶尚大学校慶南文化研究院	助教授	17-18世紀における琉球と朝鮮の風水的村落景観形成に関する比較研究	中部大学国際関係学部
崔賢	済州大学校人文大学社会学科	副教授	自然の公共的管理と持続可能な生活の事例：水と土地を中心に	神戸大学大学院 国際文化学研究科
韓禎訓	釜山大学校人文大学史学科	講師	中世韓・日荷札木簡と物流	東京大学文学部
韓泰文	釜山大学校人文大学 国語国文学科	教授	日韓文化交流の観点から見た広島と朝鮮通信使	広島大学大学院 社会科学研究科

●訪韓フェロー

氏名	所属	職位	研究テーマ	受入機関
植村幸生	東京藝術大学音楽学部	教授	朝鮮後期の細楽手：その奏楽活動と音楽伝承の分析	全北大学校芸術大学 韓国音楽学科
齋藤頼之	慶南大学校極東問題研究所	客員研究員	北朝鮮の総合的国力に関する研究—金正日死後の体制耐久力を中心に—	慶南大学校 極東問題研究所
徐亜貴	お茶の水女子大学 ジェンダー研究センター	講師	韓国の多文化主義と結婚移住女性の文化的市民権に関する研究	梨花女子大学校 韓国女性研究院
八島健一郎	ポス トン大学大学院 政治学科	博士課程修了	2014年統一地方選挙を通じた韓国中央地方関係の解明	ソウル大学校 行政大学院

在朝日本人¹の生活文化と植民地朝鮮の文化変容

本研究の意義と方法論

植民地朝鮮で日本人はどのように暮らしていたのか。植民地期日本の教育を受けた私の父は浪花節を楽しみながら聞いていた。カセットから流れてくる浪曲節を聞いて育った私は、日本の朝鮮植民地支配の歴史を学びながらも、日本に対して漠然とした興味を持った。このような経験は、植民地世代を親に持つ韓国人にとって特別なことではないだろう。現代韓国を理解するために、植民地期の日本人の生活を解明しなければならぬ理由がここにあると私は考える。

今では周知のことだが、植民地朝鮮には少なくない日本人が住んでいた。在朝日本人は、1945年の日本の敗戦当時、民間人だけで約70万人に達し、京城では、人口の約30%を占めていた²。この中には、官公吏、政治家、軍人などの「政策的植民者」とは別に、民間レベルで渡航した人々も多かった³。したがって、在朝日本人は均質の1つのカテゴリーに規定されないだけでなく、その中でも民間レベルでは「新たな生活条件への適応過程」として朝鮮人と接触し、朝鮮文化を習得したと考えられる。

特に、本研究では朝鮮で生まれ育った日本人の「朝鮮」の文化習得の過程に注目したが、彼らは一世とは異なり、「植民者」の自己意識を投影する前に、与えられた環境として「朝鮮」を受け入れた。言い換えれば、朝鮮と日本のそれぞれの「民族」(ethnic)を位階的に配列するのではなく「原体験」として朝鮮の文化を認識する傾向が強かった。在朝日本人の二世(あるいは三世)が約30%に達した1930年代の京城で⁴、彼らが日常的に接する「朝鮮人」と「朝鮮的なもの」がどのように

体現されていたのか。当事者の経験を捉え、既存の支配/被支配の植民地的二項的言説を繰り返さない方法、すなわち朝鮮で生まれ育った日本人に対する「インタビュー調査」および彼らが持っている「個人的な資料」を介して当時の生活を描き出そうと試みた。

そこで、2010年の秋から「インタビュー調査」を始め、東京に居住することになった2012年4月から2013年3月まで本格的に行った。京城の日本人小学校(16校)の連合同窓会である「連翹の会」を知り、この会を通して当時の様々な経験談や資料を収集することができた。このように、研究調査が容易に進行したのは、その方々の「朝鮮」に対する愛情があったからだろう。



インタビュー調査を終えて記念撮影(佐藤司郎先生:1918年忠清北道青山生まれ、京城師範学校卒業、朝鮮の普通学校訓導歴任)



インタビュー調査の様子(故志田時晴先生:1918年広島に生まれて1920年京城に移った、京城師範学校卒業、朝鮮の普通学校訓導歴任)

在朝日本人の「朝鮮」習得

この度の調査で明らかになったことは、下記の通りである。

京城で日本人が日常的に接した「朝鮮人」には、植民地都市的職業編制の文脈が敷かれている。すなわち、〈表:1942年、朝鮮の民族別職業構成〉をみると、日本人の場合、公務自由業、商業、工業が優位を占めたのに対し、朝鮮人の場合は農業が絶対的な優位を占めた。農業人口がほとんど存在しなかった京城で日本人が接した朝鮮人は次の二種類に分けられる。一つは都市生活者の利便性のために必要であるが、日本人は概して従事しない職種に就く朝鮮人である。例えば、「家事使用人」、「行商」、「背負子」、「水汲み」、「屑拾い」、「鉛

〈表:1942年、朝鮮の民族別職業構成〉

職業	総割合	農業	水産業	鉱業	工業	商業	交通業	公務自由業	有業者	無業
朝鮮人	100	68.1	2.0	2.1	4.6	6.9	1.4	3.9	8.9	2.1
日本人	100	3.9	1.2	3.1	18.7	18.2	7.2	39.5	4.3	3.9

※ 出所:『朝鮮総督府統計年報』1942年、朝鮮総督府

売り」などを指し、時々日本人から「鮮人」と呼ばれた。もう一つは日本人と同じ職種に従事する上層の朝鮮人として、いわゆる「両班」をいう。「両班」は植民地主義の観点では一種の被植民協力者と見なされるが、この言葉が朝鮮の伝統的な身分階級に由来したことからわかるように、植民地体制に協力しなくても「教養」と「学識」を備え朝鮮の伝統的な文化生活を営む朝鮮人は、日本人に「両班」として認識された。そして、京城の日本人はそのような朝鮮人たちとの接触から「朝鮮」を習得した。



「オモニ」とある在朝日本人の家族 (1939年京城)

在朝日本人の家庭では、朝鮮人の「家事使用人」を「オモニ」[お母さんの意味]と呼びながら、キムチを漬けてもらったり、子どもの面倒を見てもらったりした。その子どもは「オモニ」のキムチを漬ける姿や井戸で洗濯する姿を見て育ち、「オモニ」に背負われて聞いた「朝鮮語」を断片的に記憶している。また、道端で煙管をくわえながら将棋をさした「アボジ」[お父さんの意味]、物を売り歩く「行商」、そして空き瓶と引き換えに飴を売る「飴売り」から朝鮮の風物を感じた。また、チェギ[子供たちが足で蹴り上げて遊ぶ羽子の一種]、朝鮮式の凧揚げと独楽回し、チャチギ[地面に寝かした短い木切れを長い棒切れで打ち飛ばして、その距離を測って勝負をきめる子どもたちの遊びの一種]を通して朝鮮の遊びを身につけた。このように、日本人が朝鮮の文化を無意識のうちに習得していく中で朝鮮語と日本語の言葉遊びが生まれたりもした。これは、植民地朝鮮の文化交雑の痕跡として、彼らの体に刻まれている。

在朝日本人は、引揚後、「消滅された」京城の日本人学校の同窓会を組織し、自分たちの「朝鮮」の経験を基に、韓国訪問や「母校」後援などの交流活動を積極的に展開してきた。おそらく、この過程を通して、「朝鮮」の経験が現在の意味に現れているかもしれない。それは在朝日本人の歴史が現在

進行中であることを反証するとともに、戦後の約70年を経て意味化されてきた過程そのものに対するもう一つの研究課題を提起してくれるのである。



考昌公立普通学校卒業記念撮影、日本人訓導(一番上の右側)と朝鮮人生徒 (1932年京城)

(注)

- 1 在朝日本人は、日韓修好条規による朝鮮の開港(1876年)から日本の敗戦(1945年)まで朝鮮に住んでいた日本人を指す。この用語は、木村健二の『在朝日本人の社会史』(1989年)で最初に使用されて以来、学界で普遍的に使用されている。
- 2 1942年末、朝鮮の総人口は26,361,401人で、この中に日本人は752,823人、外国人は83,169人であり、外国人の大多数は中国人であった(『朝鮮総督府統計年報』昭和17年版、朝鮮総督府)。1935年の京城の人口は444,088人であり、この中に日本人は124,155人で、約28%を占めた(『昭和十年朝鮮國勢調査』)。
- 3 1906年の『統監府第一次統計年報』によると、朝鮮在留日本人(77,912人)の本籍地のうち西日本が約60%に達しており、1910年の『朝鮮總督府統計年報』によると、朝鮮在留日本人の171,543人のうち商業に従事した人口は48,802人で、職業上最も多かった。
- 4 1930年の人口調査によると、京城の日本人の約28%が朝鮮で生まれた(『昭和五年朝鮮國勢調査』)。

チャウンジョン
車恩姫

PROFILE

2008年8月 ソウル大学大学院人類学科博士課程修了
2008年11月～2010年2月 九州大学韓国研究センター訪問研究員
2010年3月～12月 ソウル歴史博物館研究員
2012年4月～2013年3月 一橋大学大学院社会研究科客員研究員
研究テーマは植民地朝鮮と在朝日本人。現在、博士論文執筆中。

2013年度 助成対象事業決定

2013年度助成対象事業には87件の申請があり、この中から56件への助成が決定しました。

●助成対象事業一覧(実施日時順)

事業名	申請団体
日韓まちづくりネットワーク形成事業	NPO法人 ドネルモ
日韓共同制作 高麗仏画《楊柳観音像》の復元模写	公益財団法人 泉屋博古館
日韓伝統舞踊交流イベント ワークショップ・韓国舞踊・日本舞踊・創作コラボレーション	一般社団法人 文化遺産調査研究保存継承機構ゆらび
日韓交流ワークショップ・展示「CONSONARE2013」	NODE
日韓青少年育成文化交流 朝鮮通信使 祝祭 参加事業	NPO法人 翔青会
急速に変転する日韓社会比較討論	新潟県立大学
五島と済州島一対馬暖流と季節風の中の島々に生きる	九州大学大学院工学研究院環境社会部門生態工学研究室
日韓高校生交流事業“YOUTH VOICES SPEECH CONTEST”	NPO法人 グローバルプロジェクト推進機構
ダンス・エクス13 DANCE-X13 韓国公演	公益財団法人 児童育成協会
第二回 日韓伝統民謡(ソリ)交流大会	公益財団法人 日本民謡協会 西日本地区委員会
韓国高校生交流事業	公益財団法人 三重県国際交流財団
日韓共同学術会議「政治思想としてのマルチカルチャリズム—東アジアにおける展望」	政治思想学会
80年代韓国演劇・リーディングとシンポジウム	日韓演劇交流センター
日韓草の根図書館交流シンポジウム～東日本大震災の経験から学びあう	日韓草の根図書館交流シンポジウム実行委員会
日韓青少年のボランティア・ワークキャンプ in 北海道・富山・京都	韓日社会文化フォーラム
日韓青少年交流訪韓団	日韓親善協会中央会
青森市青少年海外生活体験事業	青森市教育委員会
日韓青少年交流事業 百花繚乱2013 SATOYAMA ART Festival 2013	NPO法人 日中韓から世界へ
韓国「木浦共生園」との交流	社会福祉法人 県北報公会
身体の景色 韓国公演(密陽演劇祭)	身体の景色 (からだのけしき)
「韓国の友だち、アンニョンハセヨ!」—小学生ホームステイ交流2013—	NPO法人 多言語広場CELULAS(セルラス)
2013韓日青少年写真文化交流	社団法人 明るい青少年
小学生と先生による日韓ツバメ観察ワークショップ	NPO法人 バードリサーチ
14+アジアの戯曲シリーズVol.1「真如極楽—こころとかたち」	NPO法人 アートマネージメントセンター福岡
第55期日韓学生交流プログラム	日韓女性親善協会
2013日韓人形劇公演「さるじぞう」&「小豆粥おばあさんと虎」日本公演	人形劇場だぶだぶ
TIEAF2013 Tokyo-International Environmental Art Forum	TIEAF 東京国際環境アートフォーラム
—東京国際環境アートフォーラム	
第19回山口・公州ジュニア交流隊	社団法人 山口青年会議所
日韓歴史教育交流会東京シンポジウム	日韓教育実践研究会
川崎・富川高校生フォーラム「ハナ」	川崎・富川高校生フォーラム「ハナ」実行委員会
日韓獣医学生交流プログラム	日韓獣医学生協会
第8回日韓西洋中世史研究集会	第8回日韓西洋中世史研究集会準備委員会
韓国と日本の海民交流～干潟を利用した地域振興について学ぶ～	NPO法人 水辺に遊ぶ会
日韓小学生交流事業	NPO法人 元気っ子未来塾
日韓ユース・カンファレンス2013	財団法人 日本YWCA
漢拏山・富士山「姉妹山」締結 青少年交流事業	NPO法人 グラウンドワーク三島
日韓教員養成大学学生相互訪問研修プログラム	大阪教育大学
福岡インディペンデント映画祭2013	福岡インディペンデント映画祭実行委員会
「日韓交流おまつり2013 in Seoul」への弘前ねぶた囃子方出演	公益社団法人 青森県観光連盟
「日韓交流おまつり2013・ソウル」への阿波おどり出演	阿波おどり振興協会
「日韓子ども国際交流」～生活(ホームステイ)・授業体験等を通じた日韓児童の交流～	NPO法人 国際教育情報交流協会
日韓演劇家往来交流プログラム	北九州お手軽劇場アイアンシアター運営実行委員会
大邱教育大学校を中心とする現職特別研修(海外教育事情総合演習)	宮城教育大学
日韓伝統舞踊芸術公演「流」	株式会社 A Tower
躍動よさこいワークショップ&日韓交流 in ソウル 2013	NPO法人 躍動塾
日韓英国際共同製作 サイト・スペシフィック・ワーク ドリームシンク	高知県立美術館
スピーク“1980/2013”(仮)	
劇団印象-indian elephant-第19回公演「値札のない戦争」	劇団印象-indian elephant-
琉韓伝統舞踊ワークショップと現代舞踊の共創	明治大学身体コミュニケーション研究所
第14回日韓学生シンポジウム	東北大学大学院環境科学研究科川田研究室
トーキョー×ソウル ソロデュオダンス・フェスティバル2013	トーキョー×ソウル ソロデュオダンス・フェスティバル推進委員会
第9回 東アジア海港都市国際シンポジウム	国立木浦大学校アジア文化研究所
東アジア雅楽シンポジウム2013	三田徳明雅楽研究会
日韓ソウル・モニタリング学生交流会議	社団法人 エココリア
日本-韓国 ダンス交流(Exchange)プロジェクト Yokohama Dance Collection×Seoul Dance Collection “Dance Connection”	公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団
日韓歴史教科書シンポジウム	歴史教育研究会
日韓中高生交流プログラム SEOULで ダンス・ダンス・ダンスII	公益財団法人 国際文化フォーラム

実施期間	場 所
2013/4/10 - 2013/6/30	ソウル市
2013/4/17 - 2014/3/15	京都・泉屋博物館、京都国立博物館、奈良・大和文華館ほか
2013/4/22 - 2013/5/16	国立オリンピック記念青少年総合センター
2013/5/1 - 2013/11/5	韓国・Kaywon School of Art and Design、名古屋造形大学
2013/5/3 - 2013/5/5	釜山市・龍頭山公園光復路一円
2013/6	新潟県立大学東京サテライト
2013/6 - 2013/8	福岡市、福江市、済州道
2013/6/1 - 2014/3/31	大阪府内高等学校、神戸韓国教育院ほか
2013/6/4 - 2013/6/16	LGアートホールBUSAN
2013/6/5 - 2013/6/7	大阪国際交流センター
2013/7 - 2013/10	三重県立昂学園高校、県立津商業高校ほか
2013/7/6	法政大学市ヶ谷キャンパススカイホール
2013/7/10 - 2013/7/12	早稲田大学演劇博物館・講堂
2013/7/10 - 2013/7/13	川崎市立中原図書館多目的室ほか
2013/7/11 - 2013/8/27	北海道上川郡東川町、京都府綾部市、富山県南砺市
2013/7/21 - 2013/7/26	ソウル市、公州市、扶余郡、光州市、慶州市、釜山市
2013/7/23 - 2013/8/3	平澤市
2013/7/25 - 2013/7/31	狭山市・「里山交流広場・交流ハウス」
2013/7/27 - 2013/8/1	秋田市・児童養護施設陽清学園
2013/7/27 - 2013/8/1	密陽市
2013/7/29 - 2013/8/5	慶尚南道各市、ソウル市ほか
2013/7/30 - 2013/8/12	長崎県
2013/7/31 - 2013/8/31	昌原市
2013/7/31 - 2013/8/2	亀尾市・小劇場Gongter_DA
2013/8	韓国
2013/8/1 - 2013/8/13	栃木・東京・長野
2013/8/5 - 2013/8/10	駐日韓国大使館韓国文化院ギャラリーMI
2013/8/9 - 2013/8/12	山口市周辺
2013/8/10 - 2013/8/11	法政大学中学高等学校
2013/8/13 - 2013/8/17	ソウル
2013/8/15 - 2013/8/24	ソウル、東京
2013/8/21 - 2013/8/22	慶應義塾大学三田キャンパス
2013/8/22 - 2013/8/25	務安群・務安干潟とその周辺
2013/8/23 - 2013/8/25	釜山市・トンジュ初等学校、近隣エリア
2013/8/24 - 2013/8/27	韓国
2013/8/26 - 2013/9/13	三島市、済州道
2013/9/2 - 2014/2/8	大阪教育大学、ソウル教育大学校
2013/9/5 - 2013/9/10	福岡アジア美術館
2013/9/15	ソウル市・COEX Bホール
2013/9/15	ソウル市・COEX Bホール
2013/9/15 - 2013/9/17	昌原市・外洞初等学校ほか
2013/9/15 - 2013/10/15	亀尾市・小劇場Gongter_DA
2013/9/22 - 2013/9/27	大邱教育大学校、東国大学校ほか
2013/9/27 - 2013/9/27	渋谷区文化総合センター大和田 伝承ホール
2013/10/3 - 2013/10/7	ソウル市・日韓交流おまつり会場、ミチュホル外国語高校
2013/10/22 - 2013/11/16	高知県立美術館
2013/10/25 - 2013/10/27	東京・こまばアゴラ劇場
2013/11/3 - 2013/12/9	東海大学高輪キャンパス、明治大学駿河台キャンパス、成均館大学校、大田小劇場コド
2013/11/5 - 2013/11/8	東北大学片平キャンパスさくらホール
2013/11/7 - 2013/11/11	東京・セッションハウス
2013/11/8 - 2013/11/9	木浦大学校
2013/11/22	学習院創立百周年記念館
2013/12/4 - 2014/1/12	鹿児島県始良市・出水市、京畿道高陽市・江華島・坡州
2014/1 - 2014/2	横浜・象の鼻テラス、八戸ポータルミュージアムはっち
2014/1/11	桜美林大学四谷キャンパスまたは國學院大学渋谷キャンパス
2014/3/27 - 2014/3/31	ソウル大学校ほか

琉韓伝統舞踊ワークショップと現代舞踊の共創

明治大学情報コミュニケーション学部准教授 波照間永子

1. 琉球・韓国の宮廷舞踊ワークショップ

2012年12月8日(土)、早稲田大学にて比較舞踊学会特別企画「琉韓身体文化ワークショップー舞踊にみる袖の表現ー」を開催した。これに先立ち、筆者と金采姫氏(韓国文化芸術教育振興院舞踊芸術講師)が、琉球舞踊と韓国舞踊の「袖の表現」に関する研究を報告、続いて、志田真木氏(国指定重要無形文化財<琉球舞踊>伝承者)と田銀子氏(成均館大学校教授)他によるワークショップを行った。参加者は双方の実技を同時に体験することで、「袖」の表現に潜む歴史や世界観をより深く理解することができたと思われる。

参加者からは次のような感想が寄せられた。

「韓国舞踊、琉球舞踊との比較研究は具体的な分析がなされ、わかりやすかった。衣装もすばらしくワークショップの指導もハンサム(袖)を使って受講者も楽しむことが出来た。」

「琉球と韓国の舞踊を体験させていただき大変勉強になった。見ているだけだと優雅な舞という印象であったが、両者ともに実際体験すると、とてもゆっくりで持続的な動きなので筋力を使った。」



「春・袖・鶯」を共通のモチーフとする宮廷舞踊(韓国)『春鶯舞』(金采姫)

2. 現代舞踊の共同制作

以上の研究および実践の成果を踏まえ、志田真木氏と金采姫氏に、琉・韓の現代箏曲を伴奏に、袖の表現をもちいた共同作品の制作を依頼した。2013年2月20日(水)より、志田氏が訪韓、約一か月間、双方の舞踊を学びあいながら共同制作に挑んだ。この他、韓国滞在中、成均館大学校と牧園大学校(大田)で琉球舞踊のワークショップも行った。



「春・袖・鶯」を共通のモチーフとする宮廷舞踊(琉球)『本嘉手久』(志田真木)

最後に、本プロジェクトの成果発表として、3月30日(土)、明治大学にて公開講座「海域アジアにおける琉球・朝鮮の交流と舞踊文化」を開講した。前半では真栄平房昭氏(フェリス女学院大学教授)による講義「琉球王国の海外貿易ーアジアの海を越えたモノと文化ー」で、琉球と朝鮮の関わりを概説いただき、後半では、「琉球舞踊と韓国舞踊における袖の表現」というテーマで、「春・袖・鶯」を共通テーマとする宮廷舞踊二題

ー琉球舞踊『本嘉手久』・韓国舞踊『春鶯舞』ーを解説とともに実演した。フィナーレでは、双方の振りや衣装を融合した新作『春一袖に託した想いー』を披露した。



共同作品「春一袖に託した想いー」
右：琉球舞踊の演者は韓国舞踊の下装を着用
左：韓国舞踊の演者は琉球舞踊の下装を着用

本講座に参加した受講生からのコメントを一部紹介する。「沖縄と韓国の舞踊の組み合わせとのことで、どうなることかと思っておりましたが、衣装も似ており、踊りもよく似ていることに驚きました。」

「今、このようなアジアでの交流はどんどん進めてほしい。若い方にもっと受講してほしい。」

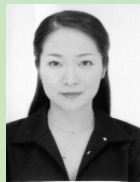
「“海域アジア”という見方をはじめて知り新鮮でした。舞踊の所作の意味もとても興味深かったです。」

「No border, No nation!」

3. 今後の課題

ー共創する“美しい舞・しなやかな絆”ー

踊る身体を通し相互の文化を体感するだけでなく、共に作品を創る「山あり谷あり」のプロセスを辿るなか、日琉韓のしなやかな絆が時間をかけて少しずつ結ばれつつあるように思う。この絆を、強さだけでなく、柔らかさも含め発展させていきたい。



はてるまながこ
波照間永子

PROFILE

専門は舞踊学。お茶の水女子大学・同大学院、日本学術振興会特別研究員PD、群馬県立女子大学文学部専任講師を経て現職。博士(学術)。沖縄タイムス芸術選賞新人部門[舞踊]最高賞、比較舞踊学会研究奨励賞、ACC Japan-US Arts Program Fellowship Grant Award、沖縄文化協会賞(仲原善忠賞)受賞。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2012年度第4四半期（2013年1月1日から3月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国青年 (第1団)	安秉杰(アン・ピョンゴル) 南ソウル大学校日本語科教授	36	16	20	1/14~1/24	横浜国立大学 ★岩手県
韓国青年 (第2団)	李震鎬(イ・ジンホ) 東西大学校デザイン学部教授	36	16	20	1/14~1/24	上智大学 ★岩手県
韓国青年 (第3団)	金恵敬(キム・ヘギョン) 富平女子高等学校日本語教師	31	7	24	1/14~1/24	東京都立三鷹中等教育学校・ 三鷹高等学校 ★岩手県

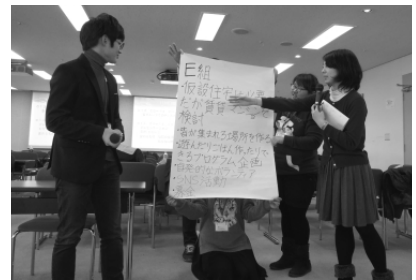


被災地の方々へのメッセージを作成

「キズナ強化プロジェクト」の一環として、高校生や大学生など計103名が、1月14日(月)から24日(木)までの10泊11日の日程で、日本を訪問しました。一行は日程中の6泊7日の間、岩手県の大船渡市、陸前高田市、釜石市などの被災地(上記★印)を訪問し、東日本大震災の被害状況について理解を深めたほか、県内でファームステイを行いました。また、都内近郊では日本文化体験のほか、学校訪問にて同世代の日本人学生と交流を深めました。



津波被害を受けた陸前高田市の旧市役所庁舎を視察



上智大学で東日本大震災と復興に関するテーマについて日韓共同で発表した

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本大学生 (第1団)	渡邊宣隆 仙台大学体育学部教授	20	7	13	3/5~3/14	韓信大学校 釜山大学校
日本大学生 (第2団)	藤本典嗣 福島大学共生システム 理工学類准教授	20	6	14	3/19~3/28	慶熙大学校 釜山外国語大学校



韓服を着て、お辞儀の仕方を習う



韓国の学生とディスカッション



東日本大震災復興に関する情報発信を行う

2 日韓青少年共同ボランティア活動事業

本事業は日韓両国の大学生・大学院生を対象とした交流事業で、両国の共通課題をテーマに定めています。両国の学生が訪日・訪韓両方のプログラムに参加し、ボランティア活動などを通して現状を把握するとともに、討論会により解決策を話し合うことで、両国の理解と交流の増進が果たされることを目的としています。

今年度は、「地域おこし」をテーマとし、2月11日(月)から17日(日)の招聘プログラムでは東日本大震災の被災地を視察し、岩手県陸前高田市で側溝の泥出し等のボランティア活動を、2月21日(木)から27日(水)の派遣プログラムでは全羅北道鎮安郡で散歩道整備や、お祭り実施のボランティア活動を行ったほか、日本団員による東日本大震災からの復興状況に関する情報発信を行いました。詳しくはp2をご覧ください。

3 第2期日韓新時代共同研究プロジェクト

2月16日(土)にソウルで最終会合を開催しました。

4 ボーイスカウト事業

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟へ委託している「日韓ボーイスカウト交流事業」が行われました。

韓国ボーイスカウト100名(スカウト87名、指導者13名)が1月10日(木)から23日(水)までの13泊14日の日程で来日し、日韓スカウト交流プログラム、岩手県の東日本大震災被災地の視察および現地高校生との交流などを行いました。

5 在サハリン「韓国人」留学生受け入れ事業

サハリン国立大学の「韓国人」学生の日本留学を支援する制度で、2012年4月からの約1年間、2名の学生が九州大学で留学生活を送り、被災地を訪問しました。計3回の被災地訪問では、被災地の現状を学ぶとともに、色々な国の留学生と一緒に側溝の泥出しや、清掃などのボランティア活動を行いました。

6 理事会

3月26日(火)に第56回理事会が開催され、2013(平成25)年度事業計画及び予算が承認されました。

7 賛助会員

2013年1月1日～3月31日の期間に、個人会員11名の方に賛助会員制度にご加入いただき、16万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)。

個人

秋鹿敏雄	内田富夫(2)	小野正昭(3)
小倉紀蔵	金春美(3)	坂井俊樹
千玄室	月脚達彦	中川聡
尹明憲	柳震太	

JENESYS^{2.0}

2007年から実施した「JENESYS」の後継として、3万人規模で、アジア大洋州諸国及び地域との間で青少年交流事業「JENESYS2.0」が始まりました。

本事業は、日本経済の再生に向けて、我が国に対する潜在的な関心を増進させ、訪日外国人の増加を図るとともに、クールジャパンを含めた我が国の強みや魅力等の日本ブランド、日本的な「価値」への国際理解を増進させることを目指すもので、本交流事業を通じて日韓両国の青少年がお互いの文化や伝統をより広く理解することが期待されています。

本プログラムの詳細については、次号にてご紹介します。

公益財団法人日韓文化交流基金では、個人会員、特別会員および法人会員からなる賛助会員制度を設けております。賛助会員になっていただいた方々には広報誌の送付や催しのご案内などを差し上げております。会員の皆さまからいただいた会費は、助成事業などを通じて日韓文化交流に活用されます。皆さまのご入会を、心よりお待ちしております。

●年会費

- (1) 個人会員 1万円
- (2) 特別会員 5万円
- (3) 法人会員 10万円

1口以上何口でもご加入になれます。

会員期間は、会費の入金日から1年間です。

●会員特典

- (1) 広報誌『日韓文化交流基金NEWS』（季刊）をお送りいたします。
- (2) 日韓文化交流に関するニュースやお知らせなどを、メールマガジン（電子メール）でお届けいたします。
- (3) 当基金が実施する各種催しの参加案内をお送りいたします。
- (4) 賛助会費により行った助成事業やその他事業につきましては年度毎に御報告いたします。

●年会費のお支払い

郵便振替口座をご利用ください。

口座番号 00160-9-668460

口座名称 公益財団法人 日韓文化交流基金

振込票通信欄には、氏名、ご住所、電話番号のほか、①希望する会員種別（個人、法人、特別）、②申込口数、③メールアドレスをお書き添えください。

趣意書

日韓文化交流基金は、1983年に設立されて以来、日本と韓国との間の諸般の交流を増進し、相互理解と信頼を深めるために多くの事業を行って参りました。多くのご理解に支えられ、設立以来当基金が蒔いてきた交流の種は、いまや両国社会において花を咲かせています。

平成24年4月1日からは公益財団法人に移行しました。私どもは、日韓間の相互理解増進という基本目標を念頭に置きつつ、従来からの交流プログラムを維持するとともに、新しい時代の要請に応えるべくさらに努力して参りたいと願っております。

当基金の活動につきまして、より多くの方々からご支援いただきたく、「賛助会員制度」を設けております。なお、皆さまからいただいた賛助会費は、当基金の事業費の一部に充当され、日韓文化交流の発展のために活用されます。

本制度を通して、さらなる日韓文化交流の発展にご支援賜りますようお願い申し上げます。当基金の趣旨にご賛同される皆さまのご協力をお待ち申し上げます。

公益財団法人 日韓文化交流基金
会 長 鮫 島 章 男

◆賛助会員制度における会費は公益法人等に対する寄附金とし、所得税・法人税の控除を受けられるようになりました。

退任の御挨拶—基金での5年間

公益財団法人 日韓文化交流基金 業務執行理事・事務局長 阿部孝哉

基金での5年間の仕事は、1967年以来、日韓関係に携わってきた私にとって、文化交流という日韓関係の中でも、未来志向的で大変やりがいのある分野であった。

日韓関係は国交正常化48年を経ても未だに負の歴史的遺産を引きずっており、多方面で交流が拡大していても、政治的懸案により関係がギクシャクするということを繰り返しているが、文化交流や次代を担う青少年を対象とする交流事業は極めて建設的な交流分野である。

回顧すると、1998年に金大中大統領による対日文化開放政策が打ち出されてから今年で15年が経過するが、その間の日韓間の交流の増大には目を見張るものがある。金大中政権誕生前の韓国社会では、日本について語ることさえ親日的であるとしてはばかれるような状況であったが、今ではソウル市内の至る所で日本語の看板を目にするようになり、若者の間でも日本酒の人気の高まっており、日本の漫画やアニメの人気の若年層を中心に広がりを見せている。日本の大衆文化の流入により韓国の伝統文化が損なわれるとして、対日文化開放に当初は消極的であった韓国社会の空気も、今や様変わりしている。日本においても韓流ブームは下火というよりは定着化しつつある時代環境となっている。正に隔世の感を禁じえないが、日韓関係は一步後退、二歩前進を繰り返しながらも進歩してきたというのが私の実感である。

近年の日韓関係は多元化しており、民間の幅広い交流が両国の善隣友好関係を下支えているといえる。当基金が関わった事業を見ても、5年前までは教科書検定問題で交流事業が一部中止になることがあったが、昨年夏の李明博大統領の竹島上陸の際には当基金の青少年交流事業が影響を受けるといったことは特になく、民間の交流も中止になった例は殆んどなかったと承知している。以前に比べ、日韓間の文化交流・人的交流が政治的懸案により影響を受ける度合いが顕著に低下しており、日韓の民間レベルの交流は政治の世界とは別次元の地歩を築きつつあるように見受けられる。

その間、日韓関係が紆余曲折を繰り返す中でも、当基金は政府拠出金を財源として過去25年間にわたり地道に青少年交流をはじめとする各種交流事業に取り組んできた。私の基金での5年間は偶々第一次安倍内閣が策定

したJENESYS(東アジア青少年大交流計画:2007~2011年度)の期間と重なり、約1万人にのぼる多彩な交流事業に関与することができた。当基金の参画した交流プログラムは、日韓の青少年に日韓関係を肌で感じるまたとない機会を提供できたものと思っている。

交流の成果については、具体的成果を示してほしいという質問を各方面から受けることがあるが、人の交流は当事者の認識乃至心証といった領域に属する活動であることから数値で評価するのは中々難しいが、交流の現場にいる者としてはそれなりの手ごたえを感じている。

JENESYS基金による交流事業に参加した韓国の青少年に意識調査(参照:公益財団法人日韓文化交流基金発行「21世紀東アジア青少年大交流計画事業報告書」)を行ったところ、日本訪問により日本の魅力と日本人の長所を発見し、それまで韓国で学校教育等を通じて抱いていた対日観が変わったという調査結果が出ており、訪日プログラムは参加者の対日認識に肯定的な影響を及ぼしているとみられる。更に、2013年度に実施したキズナ・プロジェクトに参加した韓国の青少年達の場合は、東日本大震災の被災地訪問という非日常的な体験をしたこともあって、日本社会と日本人に対して特別な感慨を抱いて帰国した様子が感想文からも窺われる。

当基金の訪韓事業に参加した日本の中高生、大学生達も、韓国訪問を契機に日韓関係についての関心を深め、交流を通じて韓国人の快活さと逞しさに接し大きな刺激を受けている。

異文化同士の交流は、お互いの認識のズレもあり、平坦な道のではないが、日韓の相互理解を増進するためには、日本人一般、特に若い世代が日韓の歴史を学ぶということが課題ではないかと思う。

私の基金在任期間中は、JENESYS(東アジア青少年大交流計画)、東日本大震災復興のためのキズナ・プロジェクト、今回のJENESYS 2.0並びに基金の公益法人移行といった画期的な事業を手掛けるめぐり合わせとなったが、心残りには財政的な理由で当基金の図書センターが閉鎖されたことである。

当基金は今年の12月で創立30周年を迎えるが、日韓関係を国民レベルの交流によって支えようという創立者の思いは、基金の伝統として末永く引き継がれていくものと信じている。(了)